



ちいき

# 地域 連携

れんけい



「地域連携」あるいは「地元の協力」、「市民参加」という表現がキーワードとして含まれる業務が、近年どんどん増えていると感じます。公園計画やピオトープづくりはもちろん、道路法面の緑化計画といった業務においてさえ、こんなキーワードが見られる状況です。

では「地域連携」とはどうやったらいいのか、「市民参加」はどうやったらうまく進められるか、となるとけっこう難しい問題です。この問題に対するヒントが得られればよいかと思い、いくつかの例を紹介させていただこうと思います。  
(北海道支社長 浜田 拓)

事例

## 箕面市 もりもりクラブ

1

約10年前、大阪での勤務を始めた頃の話です。東京で雑木林管理に関わる仕事をさせていただいたこともあり、大阪にきて、身近な樹林の管理について関心がありました。

そんな折、箕面市で「森林整備インストラクター講座」が開かれることを知り、参加しました。講座は2回で、講師を招いての室内での里山林の意義や重要性の講義、野外での実際の森林管理作業の講習と、今となっては結構当たり前ながら当時としては画期的な内容でした。

その後、講座受講生の有志という形で「もりもりクラブ」が結成され、自分たちのフィールド（箕面市所有地）で、試行錯誤しながらの活

動が継続されています。10年たった今も続いており、会誌「もりもり通信」は現在63号まで続いています。

この活動に関わって感心した点は、市の方々の取り組みでした。

通常、行政の方は定期的に部署を異動されることが多く、箕面市の場合も同様でしたが、活動はきちんと継続されていて、今も月々の活動に市の方が参加されています。どのような引継ぎがなされているのか、私にはわかりませんが、行政として継続していこうという取り組みや意識の浸透が非常に強かったのではないかと感心させられました。同時に、市の方がご自身で作業され、非常に楽しまれているのも印象的でした。



10年の間に、こんな基地ができました



また、参加者に核があったことも重要な点だと思いました。「もりもりクラブ」の中に、樹木の管理の仕方や「遊び（昼食時の楽しみや炭焼きなど）」に関しての“師匠”のような方がおり、これも活動が継続している大きな要因のひとつになっていると考えられます。

事例

## 揖保川町 ヤッコの森

2



「今日は、どこやりましょか？」

兵庫県西部の揖保川町で行われた里山整備の事例を紹介します。

対象となる“山”の整備計画を策定することが業務の中心でしたが、並行して地元との協議も行い、その意見を計画に反映させるといった業務でした。

この事業地には隣接して小学校があり、この小学校のPTAの方を中心とした里山管理の活動グループが

すでに存在していました。したがって、計画策定に当たってはこのグループの意見や希望も取り入れた形で仕事を進めて行きました。PTAの方々ですから、いろんな職種の方がいらっしゃり、ケーキ屋さんあり、電気屋さんあり、建築士の方ありとバラエティーに富んでいました。集まって活動している時に、わきあいあいとしていて、それぞれの特技

(?)を有効に活かしていたのは印象的でした。業務が終わったあとも、このグループの方に誘われて、現地を訪れたこともあります。

ここでは、PTAという、地域に根ざしたグループが核になっていたことと、そのグループとうまく連携できたことが、業務を進める上で、また里山の管理を継続する上からも大きかったと考えられます。

事例

## 高槻市 上の池公園ビオトープ

3

当社として本格的にビオトープに取り組んだ最初の事例であり、関西のビオトープとしては、かなり先駆的なものとされている上の池公園の「トンボ池」。事業の詳細は都市基盤整備公団から多数の報告がされています。ここでは「地元との関わり」の部分述べます。

上の池公園についても、「地域連携」や「市民参加」は昔から課題で

したが、なかなかうまくいかず、試行錯誤しているところでした。

そんな中、「近隣にある小学校のプール（夏以外の時期に水を貯めてある）に生息するヤゴを救出したい」ということから話は始まりました。「ヤゴ救出大作戦」と名付けられた活動は、ここでもPTAから発生した「わくわく隊」という子供たち  
( 次頁へ続く )



「何匹いるかな？」

(写真提供：わくわく隊)



「さがせ！さがせ！」

(写真提供：わくわく隊)



事例

## 京都府 栗山管理

4

この事例は「地域連携」や「市民参加」を目指したものではありませんが、これらに通じるものがあると思うので紹介させていただきます。

仕事で知り合った方との雑談の中の「栗山で遊ぼうか？」という話から発展したもので、栗山の管理に留まらず、雑木林の林床整備、しいたけのほだ木作り&菌打ちと、楽しみは広がっていきました。

この活動は残念ながら、仲間の増加にはいたっていませんが、個人的には非常に楽しいものです。

では、何が楽しいか。まず、草刈をすること。これは私にとってはボランティアではなく、レクリエーションで

す。夏の暑さも、蚊に刺される痒さも問題ではありません。「純粹に楽しい」行為でした。また、「栗山」のある町、人、空気、全てが私と一緒にいった家族にとって心地よいものでした。こういう感覚もあると理解した上で「市民参加」について考えると、新しい発想が出てきそうに思えます。

### おわりに

このほかにも多数の活動が近畿圏の各地で行われており、また、その中にはNPO法人として立ち上げられたものもあります。しかし、ここでは限られた経験ではありますが、私がいかに実際に関わりあって感じたことをお伝えしたいと思い、いくつかの実例の紹介をさせていただきました。

実際に体験した活動を通じて、「地域連携」や「地元との協力」が

うまくいくために大事なことは次の点ではないかと感じています。

核となるメンバーやグループの存在  
行政の（一定期間の）継続的な協力  
参加する人の意識  
（ボランティア意識から、個人の  
レクリエーション的楽しみへ）

あたりまえの結末ですが、これが“王道”なのでしょう。あわせて、そこに携わる人が「その場所を好きになること」も大事な点ではないかと思いました。

コンサルタントとしては、「では、どのようにして好きにさせるか」ということになります。今後も、「地域連携」や「市民参加」に関する要望は高まって行くものと考えられます。これまでの経験を生かして、それぞれの場所に合った提案や関わりをしていきたいと考えています。

（前頁の続き）

対象の“地域活動サークル”と出会ったことによって、ヤゴの一部を放した「トンボ池」の管理作業や観察会での協力に発展していきました。

その後、高槻市の協力もあり、ため池のかい掘り、観察会、周辺の樹木の名札付け等々と活動は継続しています。

この事例でも、地元に着したグループの存在が非常に大きかったと

思います。

それにしても、最近のお母さんたちのパワーとIT化には脱帽しました。



「わかったー？」



「イトトンボはどこや？」



（写真提供：わくわく隊）



子供も大人も泥だらけ・・・でも、楽しい！

事例

## 高槻市 上の池公園ビオトープ

3